

福沢諭吉とレオン・ド・ロニー

「植てみよ花のそたため里はなし…」考

FUKUZAWA YUKICHI AND LEON DE ROSNY

A Study of ‘Just Plant and See
that any Village is Fit for Blossoms…’

谷 口 巖*

León de Rosny (1837-1914), a native of northern France, through self-study pioneered Japanology in France.

In 1862 Fukuzawa Yukichi (1835-1901), who accompanied the bakufu's first diplomatic mission to Europe as an interpreter, developed a friendship with de Rosny while in Europe, very much to their mutual benefit.

Soon after the mission's return to Japan de Rosny was approved to assume the chair in Japanese language at the East Asian Languages' School in Paris. In the textbook, *Recueil de textes japonais* (1863), which he prepared at that time, there exists a page which seems to contain a waka from Fukuzawa's own brush which Fukuzawa wrote for him.

“Just plant and see that any village is fit for blossoms. They are born from the heart though the social rank be low.” This is

* TANIGUCHI Iwao 愛知教育大学教授。東京大学大学院修士課程修了。論文に「レオン・ド・ロニー年譜及び著作目録ノート」「開化のモラリスト-服部撫松のこと-」などがある。

that poem. Ever since Ishikawa Kanmei's *Fukuzawa Yukichi den* (1932), several scholars have mentioned this.

However, the question remains as to whether this waka is indeed Fukuzawa's own poem. Doubts have been raised which attribute it to collections of proverbs, common sayings, or old poems, so after all it is not Fukuzawa's creation. According to Maeda Kingorō's researches in *Hyaku monogatari* (1659) among others, an almost identical waka can be seen sprinkled here and there in the *kana-zōshi* of the Edo period. The inspiration for those leavings of Fukuzawa's brush was born in the background of the literary attainments of this genre.

The obvious meaning of this waka can likely be seen as an emphasis on human effort and its encouragement. When asked by the self-taught Japanologist de Rosny for an example of a contemporary poem, it is easy to imagine why this waka was the first to surface in Fukuzawa's mind.

However, at the same time, should we not pay particular attention to the fact that consciousness of human equality and independence are also hidden in this poem? I would like to see another side of the meaning of this poem, which was accompanied by his signature, to be an indication of the strong self-assertion of Fukuzawa himself. This is an example which brings to mind the deep-rootedness of Fukuzawa's thought, "Heaven creates no one above others."

1862年1月22日（文久元年12月23日）、江戸の品川沖を発った徳川幕府の第一回遣欧使節団約40名は、フランスを始めとするヨーロッパの数か国を歴訪して、翌1863年1月29日（文久2年12月10日）、無事江戸へと帰着する。

一行の中には通詞・翻訳方などとして働かれた福沢諭吉・松木弘安・箕作秋坪等の洋学者がおり、外国語のできる彼らは、比較的自由に現地の人や文物とも接触して、貴重な経験をそれぞれに持ち帰った。日本の近代化の初期の教科書とも称せられる福沢諭吉の『西洋事情』（初編1866、～）の出版などは、到底この使節団への参加無くしては、あり得なかったことであろう。

その福沢がバリの旅宿で出会い、滞欧中親しく交わる機会の多かった青年が、レオン・ド・ロニー（Léon de ROSNY）である。フランス北部のノール県出身で、ほとんど独学で日本語を学び、この年日本からの使節団の応接役を政府より命ぜられて、一行の前へ姿を現わしたのであった。当時福沢は27歳、ロニーは25歳になるところである。

二人の会話は、英語に日本語を交えて行われたらしい。理解の不足するところは筆談で以て補われたと思われる。福沢が持っていた手帳には、ロニーの特徴ある漢字の筆跡が残されており、それはロニーの中国語・日本語の学習歴の一端を記したものと考えられる^①。不十分な環境の中で、日本学の開拓に志した青年の熱意が、そこからはよく伝わって来る。ロニーは福沢たちに向けて、日本語に関するさまざまな質問を發し、勉学上の疑義を多く解くことができた。

一方福沢がロニーとの交際を通して得たものは、主としてヨーロッパ諸国の国情や外交関係、また社会や文化の諸相にわたる基礎的知識だったようである。ともかくも二人の青年は、自分の最も知りたく思う事柄について、限られた機会の中で、貪欲に相手に問いまた答えたことであろう。

今ここで、彼らの間に交わされた問答の全般に立ち入るつもりはない。ただ福沢がロニーの手もとに毛筆で書き遺した、一首の和歌についてのみ問題を限り、その周辺を巡って考察を加えてみたいと思う。

植てみよ花のそたゝぬ里はなし

こゝろからこそ身はいやしけれ

というのがそれで、この歌に続けては、「福沢諭吉」という、まぎれもない自署も添えられている。

二

このような墨跡の存在が、日本に知られることとなったのは、ロニーが福沢のこの揮毫を、使節団中の他のメンバーの筆跡とも併せて、彼の編纂した日本語教科書中に、文例や書体の生きた見本として、石版刷りで印刷・提示したからである。『日本文集』(Recueil de textes japonais, 1863) というのがその書の題名である。

パリの東洋語学校では、幕府の遣欧使節団が引き揚げた翌年、初めて日本語講座が開かれることとなり、ロニーはその講師(無給与)に任ぜられたが、上記の書はその講義のために新たに出版されたものであった。福沢の署名のある「植てみよ…」の歌は、この書の目次では「古代及び現代の詩」(Poesies anciennes et modernes)の部に分類されている。とはいってもその内容は、「百人一首」の歌(天智天皇)が一つに、撫松庵主人(岡崎藤左衛門)の署名のある七言の「対句」が一つと、福沢の書いたこの歌ぐらいのものであるから、まさしくこの揮毫は「現代の詩」の代表の扱いを受けた訳であった。

さて、署名まで入っているこの歌は、はたして福沢自身の歌であるかどうか。これがまずさしあたりの問題である。

この歌を福沢諭吉自身の作と考えてそれに言及している評者も無いではない。(自分もかつてはこれを福沢の即興の作か、と考えていた。)しかし、福沢自身は、やまとうたの道になじんだ人ではないし、いささか教訓臭のあるこの歌は、余音嫋々の名作とも言いかねる。多くの人が「和歌に似たもの」と言い、「俗諺」・「道歌」の類かと判じ、また単に「古歌」と記して来たのは、偏らないも

のの見方であった。依然としてこの歌の原作者を確定することはできないが、少なくともこの歌が福沢諭吉の創作でないことは確かなのである。

前田金五郎氏の論文『「百物語」雑考』（言語と文芸40、1965）を読んだのは最近のことである。自分の不勉強の恥をさらすようだが、氏は早くこの文章の中で、「植てみよ…」の類歌を、江戸時代の作品中から、10例も指摘しておられるのであった。以下に、氏が言及された順序に従って、その10の出典名と刊年とを記す。（刊年については比較の便宜のため、西暦換算の数字をも示す。）

- ① 百物語・上 （万治二…1659）
- ② わらひ草 （慶安四…1651）
- ③ 誹諧類船集・四 （延宝五…1677）
- ④ 女式目・下 （寛永?… ）
- ⑤ 私可多咄・二 （万治二…1659）
- ⑥ 続狂言記・五 （元禄十三…1700）
- ⑦ 吉原源氏五十四君（貞享四…1687）
- ⑧ 当世阿多福仮面 （安永九…1780）
- ⑨ 里のをだ巻評 （安永三…1774）
- ⑩ 塩尻・六十五 （享保二?…1717）

上記のうち『女式目』については刊記がなく、伝聞により寛永年間（1624～44）か、とされているので、これを省いて考えるとすると、「植てみよ…」の歌は、「（当麻の）中将姫」の作という口碑をも含みながら、17世紀の後半から18世紀の後半にかけて、広く「仮名草子」という分類に入れて考えることのできる書物中に、かなりの頻度で登場していた伝承歌、ということになろうか。

ここで〈歌人〉福沢諭吉は、その肩書きを失うことになるのだが、次の問題として、むしろわれわれに興味を湧いて来るのは、なぜ彼が、自分の署名まで添えて、この和歌らしきものをロニーに与えたか、ということであり、さらにまた、前田氏の掲げられた出典リストとの関係で、若き日の福沢の読書の範囲について、いささかの考察を進められないか、ということである。以下、それ

らについて言及する。

三

福沢諭吉が、ロニーのところに書き遺したこの和歌は、8年たって再度ロニーの著作物中に引用された。すなわち『詩歌撰葉』(Anthologie japonaise, poésies anciennes et modernes des insulaires du Nippon, traduites en français et publiées avec le texte original, 1871)がそれである。

福沢の揮毫は、今度は署名の部分を消し、歌の部分のみ四行書きから七行書きへと体裁を改めて、巻末資料中に提示されているが、この本ではさらに本文中「Ⅲ、雑歌」の章にも、ロニーの筆になる「植てみよ…」のフランス語訳と解説とが示されている。

Plantez! il n'est point de hameau qui ne puisse produire des fleurs ; c'est à cause (des imperfections) de notre coeur que notre personne est (parfois) méprisable.

というのがその仏訳であり、また、

On veut dire par là que tout homme peut, avec de la bonne volonté, obtenir des résultats utiles. S'il ne les obtient pas, c'est à la nonchalance volontaire de son esprit, bien plus qu'aux défauts inhérents à sa nature, qu'il doit son insuccès. (下略)

というのがその解説であって、ロニーが原歌の意味をよく理解していることがわかる。

すなわちこの歌は、目的を持って修業や努力することの大切さを説いたものであり、いかなる環境下にあっても、人間の精神はそれを可能にする、という主旨のものなのである。

福沢がこの和歌をロニーに書いて与えたその意図は明白であろう。たとえロニーが福沢たちに乞うたのが、漢詩や和歌をも含めた日本語の単なる文章見本であり、草書や行書等の書体見本であったとしても、福沢は自分の記憶の中に

あったこの伝承歌の揮毫に、ロニーに向けた、自分の心からのメッセージをも込めたのであった。独学の大きな困難にもうちかって日本語の学習にさらに励み給え、人間は誰だって、志さえ固ければ、どんなことでも成し遂げ得るのだと、福沢はロニーに激励の言葉を贈ったのである。凜とした署名にも、その思いは託されていると見たい。

さらにその時福沢が、今後の学習の進め方について基本的な指針を与えていることにも注目せねばなるまい。これまで言及されていないことだが、1863年刊の『日本文集』には、「植てみよ…」とは別のページに、もう一箇所福沢のものと同定可能な筆跡のページがあり、そこにはこんな言葉が読み取れる。

都て外国人は日本の俗文を解し不申候／併し外国人と申候とも両三年も
日本え参り執行致候と随分出来可申と存候
すなわちこれは、今までのロニーの学習の進め方が、文献解読を中心としてきたため文語に偏っており、その欠を補うためには、口語すなわち「俗文」を重要視しなければならぬこと（そしてできれば日本渡航の機会を得てそれを現地で学習すべきこと）を、奨めた文と判断される。

この忠告がロニーに与えた影響は大きかった。なぜなら、使節団のバリ滞在中にロニーが自分の属する人種誌学会へ出かけて行っておこなった報告の中に、日本語に関し自分が新たに得た知見の一つとして、この「俗文」(style vulgaire ou journalier) のことが、力点を込めて語られているからである^②。

彼はさらに翌年、東洋語学校の日本語講座の『開講演説』(Discours prononcé à l'ouverture du cours de japonais à l'École impériale et spéciale des langues orientales vivantes, 1863) 中でも「俗文」(langage vulgaire) の重要性を指摘し、1865年刊の日仏会話の案内書『和法会話対訳』(Guide de la conversation japonaise) の中でも「zo-kouï-boun」を話題にし、やがて1872年ごろまでには、3箇年用全20冊の形でややその体系が出来かかる「日本語実用講座」において、その三分の一以上の冊数を「俗文」(langue vulgaire) の学習用にあてる、という構想へと辿りつくのである^③。

福沢の与えた「俗文」重視の考え方が、いかにロニーに影響を与えたかは、これでわかるであろう。

しかし遂に、ロニーは日本に来る機会を持たず、その「俗文」を中心に据えた日本語の教授体系も、十分には実現することなく終わったようである。中年以降の彼の知的関心は、日本語そのものを対象とするよりは、むしろ仏教研究の方へと多く向かうこととなった。それでも彼は、東洋語学校の日本語講座（1868年以降正式講座となりロニーはその教授に任ぜられた）の担当を続け、1906年に至って定年でその職を退いた。彼の日本語・日本文学関係の蔵書は、出生地に近いリール市の市立図書館に、保管されていることを付言する。

四

さてもう一度、前田氏の論文に立ち返ってみることにしよう。

「植てみよ…」の歌を27歳の福沢が知っていたということは、あるいは幼・少年期にその和歌のみを誰かに教えられて、ただ諳んじていたというだけのことかもしれない。しかし他方、前田氏の挙げられた類の作品のいくつかを彼が実際に読んでいたのではないかという疑いも、また捨てがたいのである。とりわけ①と⑨などは、その可能性が高い。

まずその①について見てみよう。

『百物語』の作者は不明だが、その内容は有名歌人・詩人の逸事・奇聞、また笑話の類を百話集めたものである。上巻・下巻各50話、その上巻の冒頭第一話の中に、「植てみよ…」の和歌は出て来るのである。余り長いものではないので、以下にその全文を引用しよう。

人の語りけるハ、^{とうぼ}東^{こじ}坡居士のいひをきしとかや、人の手ならひするに、^{まづしん}先真をならひ、次に^{ぎやう}行をならひ、次に^{さう}草を習べし、^{しん}真は立がごとく、^{ぎやう}行ハゆくがごとく、^{さう}草ハわしるがごとし、それよくたつてゆかずハ、はしるものハあらじといへり。此事、^{じもんるいじゆ}事文類集に見えしと也。誠に^{まこと}本^{もと}立^{たつ}て^{みち}道なるといふことハりなるべし。此国にならへるハ、^{とうぼ}東坡のいへるとハかへさまな

り。先草^{さう}を習^{ならひ}て行^{ぎやう}をならひ、真^{しん}をならふと也。かくのとき人^{ひと}もまれなり。たゞ大かた草^{くさ}ばかり覚^{おぼ}ゆるゆへに、文^{ぶん}旨^{もつ}にして、真^{しん}に書^{かく}字^じはよくしりたる字^じにてもよミえざるなり。いと口^{くち}おし。心^{こころ}をつくして習^{なら}ば、などかならひえざらん。哥^かに、

植^{うへ}て見^みよ花^{はな}のそたゝぬさともなし^(ママ)

こゝろからこそ身^みはいやしけれ

といへり。又兼^{けん}好^{こう}も、手^てのわろき人^{ひと}のはゝからずかきちらすハよし、見^みくるしとて人^{ひと}にかゝするはうるさし^④。

この文章は手習の順序とその心がまえとを説いたものとして読める。まず基礎的な真（楷書）から入って行・草と先の段階へ進むべきであり、下手を気にせず一歩々々、怖めず臆せず努力すれば、必ずその成果は得られるだろう、と述べている。

これは全くロニーの抱いていた学習上の迷いに対して、よき指針となる小話である。もし福沢に、かつて『百物語』を読んだ経験があったとしたならば、その記憶の中から「植てみよ…」の歌が、反射的に想起されて来たことは、十分にあり得ることであろう。

さらに、『百物語』と福沢との関連を探ろうとするならば、両者を結びつける〈状況証拠〉の如きものはいろいろと指摘できる。『百物語』の執筆姿勢、内容・形式などと福沢の著作物との間に類縁を求めてみると、

a、逸話への興味……『童蒙教草』（1872）

b、笑話への関心……『開口笑話』（1892）

c、書名上の類似……『福翁百話』（1897）

d、怪異否定の思想…『福翁自伝』（1899）

等々が挙げられよう。やはり福沢は、『百物語』を読んでいたのではないだろうか。

次には⑨の『里のをだ巻評』である。これは平賀源内の著した『風来六部集』中の一編である。

『里のをだ巻評』の内容は、江戸の花街としての深川・吉原の優劣論で、花景・古遊散人・麻布先生の三人が登場する。このうち花景は岡場所である深川の擁護者で、どの場所の遊女も元来は同じ人間であり、容姿の美醜や品格の上下に差はないと主張する。「植てみよ…」の和歌が出て来るのはその花景の台詞の中である。部分的に摘記してみよう。

其時花景銀烟管^{ぎせる}を取直し、灰吹をくわちくわち^{たいき}と敲あざ笑て曰、「古遊子の論、高きに似て甚低し。されば古哥にも『植て見よ、花の育ぬ里^{ママ}もなし、心がらこそ身^{いや}は賤しけれ』、同じ天地の間に生ずる人間、国をわけ郡をわけ、村をわけ里をわけて、其品を論ずる^{ひがごと}は僻事なり。いかにも吉原は日本第一の遊所にて、女の姿勝れたりといへども、百人が百人千人が千人ながら能と定めたるにもあらず。(中略)吉原にも糸瓜^{へちま}有、岡場所にも美人あり。(中略)土橋・中丁は扱置、根津・音羽・萊菔園^{だいごぼたけ}にも楊貴妃^{ようき}・西施^{せいし}が有ふもしれず^⑤。

『福翁自伝』などを通して知る限り、福沢は品行方正の人であり、殊に女性関係については潔癖な家庭重視の人であった。その福沢の読書の範囲に、遊廓の評判記に似たものを入れて考えるのは、いささか不似合なことに思われるかも知れない。が、上記の源内の著作などは、決して尋常な風流人の遊廓評の類ではないのである。固陋な幕藩体制のもとにあつて、自由に己れの才能や志を遂げられぬ「個人」の怒りが、戯作の仮面をかぶったこの作品の裏側には、重く抑え止められている。花景が「植てみよ…」の和歌を引いて説くところは、源内の人間観を代弁したものであろう。そしてその発想は、後の福沢論吉の人間観にも根本的なところでつながって行く性質のものである。

福沢が『里のをだ巻評』を読んでいたという直接的な証拠はない。しかし彼が洋学の先覚者である源内の著作のいくつかを読み、秘かに共感していたであろうことは十分に推定できる。さもなければ、『文明論之概略』(1875)中の、次のような源内評は、出て来ることはなかったであろう。

和学小説狂詩狂文等の盛なるは特に天明文化の後を最とす。本居、平田、

馬琴、蜀山人、平賀源内等の輩、皆有志の士君子なれども、其才力を伸るに地位なくして徒に文事に身を委ね、其事に託して或は尊王の説を唱へ、或は忠臣義士の有様を記し、或は狂言を放て一世を嘲り、強ひて自から不平を慰めたるものなり^⑥。

以上、前田氏の示した出典のうち①と⑨についてのみ言及して来たが、福沢が読んだ可能性のある本となると、他の番号を付した作品の中にもなお検討に値するものがあるであろうし、さらに①～⑩以外にも、「植てみよ…」の和歌に関係した文献は、存在するだろうと思われる。

だがここで、これ以上煩瑣な出典論に深入りして行く必要はない。要は、若き日の福沢の読書の範囲が、四書五経や左国史漢・蘭語や英語以外にも、この種の「仮名草子」や「断本」といった類の本にまで及んでいたらしいことが、ある程度実感できればよいのである。『唐人往来』（1865稿）や『学問のすゝめ』（初編1872、～）等で、磊落雄弁体とでも称すべき「俗文」を駆使して、日本の近代の文章革新の先導役を担った福沢の、その文章の才と言われるものの源は、硬・軟とりまぜた、幅広い文学的素養にあると、敢て言いたい気がする。

五

「植てみよ…」の歌をロニーに書き贈った時、福沢がその歌に込めたロニーへのメッセージのことはすでに述べた。しかし、福沢が示したこの歌には、ロニーへの激励の意味の他に、同時に自分自身にも言い聞かせる鞭撻や決意表明の感情が込められていたのではないか。そのことを以下に述べて、小論の結びとしたい。

福沢の明治2年（1869）の著作『世界国尽』を読んでいると、その「欧羅巴洲」の節に至って、次のような部分に行き当たる。

土地の広^{ひろ}袤^すを較^{くら}べば／五大洲の末なれど／狭き国土に空地なく／人民^{つね}恒
の産を得て／富国強兵天下一、
文明開化の中心と／名のみならず其実は／人の教の行届き／徳誼を修

め知を開き／文学技芸美を尽し／都鄙^{みやこみなか しよべつ}の差別なく／諸方に建る学問所、
／幾千万の数知らず。

彼の産業^{か スギハヒ}の安くして／彼商売^{かの}の繁昌し／兵備整ひ武器足りて／世界に誇る
る太平の／その源を尋るに／本^{もと つとむ}を務る学問の／枝に咲きたる花ならん。

花見て花を羨むな、／本なき枝に花はなし。／一身^{ヒトリ}の学に急ぐこそ／進
歩^ミはかどる紆路^{マハリミチ}、／共に辿りて西洋の／道^{さかゆ}に栄る花をみん^⑦。

すなわち、この七五調の長詩で、福沢が用いている「花」や「本」の語の意味に則して考えるならば、「植て見よ…」の歌で「花」の意味するところは〈西洋の文明〉、「里」は〈日本〉、「植」えるべきものは〈学問〉、そしてそのことを誓うのはまず〈自分自身〉という風に、当然解し得るのである。

そして、そのような認識や決意の前提になるものとして、この歌の中には、〈人間平等〉の思想や〈独立自主〉の精神が、まぎれもなく存在していると、指摘できよう。

天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと云へり^⑧。

という『学問のすゝめ』（1872～）の冒頭の部分はあまりにも有名である。この一句の出典については、米国独立宣言その他、いろいろと詮索されてもいる。しかしこの句で明言された福沢の人間の平等や独立の思想は、明治に入って『学問のすゝめ・初編』とともに突然に出現したものではない。たとえば早く「植てみよ…」のような一首の引用歌の中にも、その思想はまぎれもなく現れている。その底流するところは根深く、時代の境を越えて溯り得るのである。

注

- ① 『福沢諭吉全集・第十九巻』（岩波書店、1962）による。
- ② 『Actes de la Société d' Ethnographie』。ロニーの報告は1862年4月21日に行なわれた。
- ③ 『Cour pratique de langue japonaise』。その第1学年用の7冊は Enseignement de la langue vulgaire の課程とされている。
- ④ 『断本大系・第一巻』（東京堂出版、1975）による。
- ⑤ 『日本古典文学大系55』（岩波書店、1961）による。
- ⑥ 『福沢諭吉全集・第四巻』（1959）による。
- ⑦ 『福沢諭吉全集・第二巻』（1959）による。
- ⑧ 『同上・第三巻』（1959）による。

討議要旨

本田康雄氏から、福沢諭吉と同様坪内逍遙も俗文の使用を勧めている、との指摘があった。座長の芳賀徹氏より「こころからこそ」の意味について質問があり、発表者は「こころから（心柄）こそ」と読むべきであろうと答えられた。